都留文科大学研究紀要　第93集（2021年３月）
The Tsuru University Review, No.93（March, 2021）

死に人生の意味を見出す
― シャーウッド・アンダソンの「森の中での死」を読む（後編）

Finding the Meaning of Life in Death:
Sherwood Anderson's "Death in the Woods"（Part 2）

儀　部　直　樹

GIBU Naoki

スピリチュアリティ教育のすすめ

本作品論の前編において私は、科学的な情報を活用したスピリチュアリティ教育の観点で文学作品の登場人物の死に光を当て、その人物の人生の意味を探り、できることならその死の中に、ささやかながらも救いを見出したい、と述べた。ここで私の言う「救いを見出す」とは、物語のその人物は、たとえ生きている間何一つ良いことがなく死ぬ時も孤独であったとしても、この人物は少なくとも読者にとっては、生まれてくる価値があったと思えるような肯定的な読み方を試みることである。この試みは、文学探究にスピリチュアリティ教育を生かすことで可能になる。スピリチュアリティ教育の死生観は「死ぬということは体を離れて生きること」である。しかしこの死生観は、話の中で誰かが死ぬのであればどんな文学作品の読み方にも応用できる、というものではない。

スピリチュアリティ教育の思考は、唯物論的な性質の強い文学には通用しない。唯物論とは、目に見ないものや物理的に実証できないものは信じない、人間はその肉体の死とともに宇宙から泡のように消える、霊魂などの意識体は存在しない、この世や人生に起きることはすべて偶然であり、その人間の想念や感情や言動が物事の結果に影響を及ぼすという「因果の法則」の働きなどはありえない、と考える哲学、死生観のことである。

頑迷な唯物論者たちが登場する古典作品の代表例として、プラトン著（岩田靖夫訳）『パイドン：魂の不死について』（岩波文庫）が思い出される。この作品は、ソクラテス刑死の日の早朝に、ソクラテスに別れを告げに集まった弟子たちとソクラテスとの、「魂の不死」をめぐっての深く厳しい哲学的対話の内容を書いたものである。弟子の中には唯物論者もいる。ソクラテスは、「哲学者は死を恐れない。死とは魂と肉体との分離であり、哲学者は魂そのものになること、すなわち、死ぬことの練習をしている者であるのだから」と弟子たちに説く。ソクラテスは「死んだ時にはじめて、魂は肉体から離れ、自分自身になるだろう」と考える。これに対して、唯物論的思考のケベスは、「魂は肉体から離れると煙のように飛散消滅するのではないか」と反論する。弟子のこの反論を受けて、ソクラテスは霊魂不滅の証明をしていくのだが、今度は、もう一人の弟子であり唯物論者であるシミウスが、「魂が肉体の調和ならば、肉体の壊滅と同時に魂も死滅する」と主張する。このような「霊魂不滅論」対「唯物論」論争は、現代においても続けられてきており、終わることはないであろう。

唯物論的傾向の文学の一つに、自然主義文学がある。このことについてはすでに前編でもいくぶん触れた。唯物論的文学の作家は、老婆のような体をした女性が雪の降る森の中で孤独に死にゆく過程を、いつくしみを持って描くことはしないであろうし、そういう場面には興味も湧かないであろう。なぜならば唯物論的作家にとっては、肉体の死の果てには何もないからである。彼らにとって死とは、病院で迎えようとも、この老婆のように行き倒れであろうとも、取りも直さず、無になることである。したがって彼らにとっては、その女性の孤独死に至るまでの過程には、深い意味など何もない。死の向こうを想像すること自体が全く無駄なことである。つまり、行き止まりの黒い壁ともいえる無を描くことはできないのである。

スピリチュアリティ教育が生かせるのは、その人物の「死」を見つめ考えることで、必然的に、その死の直前の「生」が輝きを増していく、そういう作品に限られる。そういう死生観が展開される物語は、人間の死の扱い方が丁寧であり、文章には人間の霊性に対する畏怖の念が「音楽」のように静かに流れている。

私が論じてきているシャーウッド・アンダソン（1876-1941）の短編小説「森の中での死」（1933）では、語り手によって老婆が死ぬ瞬間までの過程が鮮やかに語られる。遺体の見目形も美しく描出される。痩せた老婆が遺体になると、“charming girl”“beautiful young girl”“so white and lovely”な存在になるのだ。遺体が雪で凍ったせいとはいえ、哀れな姿をしていた老婆が一夜にして美しい容貌の少女にまで若返ることは現実的にはありえない。これは何を示唆しているのか。来世に向けての新たな生命の誕生の準備を象徴しているのか。まるで「生」と「死後の世界」との境には半透明の薄いスクリーンがあるようだ。語り手は、それ以上は踏み込もうとはしないが、その向こう側には、何かが実在しているように読者には思えてくる。誰にも看取られることのないその弱き者の最期からは清らかでやわらかな光を帯びた「霊性」が発せられていき、そしてその霊性は、薄いスクリーンを通り抜けて無限の大宇宙の中で清らかな意識体として力強く永遠に生き続けていくようだ。人間の肉体は、所詮は「現し身（うつしみ）」「空蝉（うつせみ）」にすぎず、その本質は「霊性」ではないか、そしてその老婆の霊性を表現している言葉が“charming”“beautiful”“white and lovely”ではないか、というふうにも思えてくる。

「文学探究にスピリチュアリティ教育を生かす」という、この私の考察方法を支えてくれる主な文献は、経営心理学者飯田史彦著の「生きがい論」シリーズ、飯田氏とシュタイナー教育の専門家である道徳教育学者の吉田武男氏の共著『スピリチュアリティ教育のすすめ』（2009年）である。

まずは『スピリチュアリティ教育のすすめ』の第一章「スピリチュアリティ教育の基本原理」における飯田氏の文章を紹介する。飯田氏は、「スピリチュアリティ教育」を次のように定義している。

> スピリチュアリティ教育とは、「偉大なる宇宙意思との繋がりや、永遠の生命（魂）の存在、奥深い人生の仕組みなど、スピリチュアルな概念を前提にする人間観・宇宙観を、人生のあらゆる事象に価値を見出すための思考法として活用しながら、勇気と希望と使命感に満ちた人生を歩むことができるように導くこと」である。(1)

宇宙には意思があり、永遠の生命（魂）が存在する、という前提は極めて神秘的であるため、これを教育にするのは警戒される恐れもある。しかし飯田氏は、宇宙には人を幸せへと導いてくれるような奥深い仕組みや法則があるという仮定が希望をもたらす、という考えで、この研究をしているのである。

飯田氏は、スピリチュアリティ教育の基本方針について、こう説明している。

> スピリチュアリティ教育の基本方針とは、人生のあらゆる事象に意味や価値を見出すことができるような、適切な思考法や有益な情報を効果的に伝えることによって、相手が自分自身で「心の免疫力や心の自己治癒力」を高めていくように導くことである。(2)

飯田氏は単著『生きがいの創造』を始めとする「生きがい論」シリーズにおいても、科学的な根拠を明示しつつ「死後生仮説」や「生まれ変わり仮説」、「ライフレッスン仮説」、「ソウルメイト仮説」、「因果関係仮説」を提示してきているが、その大きな目的の一つには、「自殺防止」があげられる。たとえば、愛する者に先立たれて絶望し、生きる意欲を喪失した人、つまり愛別離苦の中にいる人には、「死後生仮説」や「ソウルメイト仮説」を用いて、死後生で再会を果たせることを証明したうえで、この再会はもしも自殺をしてしまったら叶わなくなるという仕組みも、できるだけ医学的な事例・証拠を示しながら説明し、生きるという選択を促す。スピリチュアリティ教育の基本方針にも、この目的が含まれていると考えてよいだろう。

とはいえ、「スピリチュアル」という言葉は、どうしても宗教的な宇宙観を連想させてしまう。飯田氏は、個々人の信仰的生き方を大いに尊重しつつも、あくまでも研究者の立場で、学問としてのスピリチュアリティ教育をすすめている。その飯田氏は、宗教とスピリチュアリティ教育との関係について、以下のような私見を持っている。

> 「宗教と科学の融合」については、「特定宗教の教義を科学的観点から支持する」という方針であれば可能であるが、各宗教の教義が異なっており相互に排他的である限り、個別宗教の壁を越えた「宗教全体」との融合は、方法論的にみて極めて困難である。
>
> したがって、スピリチュアリティ教育を平和的・効率的に普及させるためには、各宗教の優劣を問う不毛な論争につながる危険性を避けて、「宗教的スピリチュアリティ教育」と「科学的スピリチュアリティ教育」とを、形の上で区別しておくことが有効である。(3)

この私見からもわかるように、飯田氏のスピリチュアリティ教育は、生きがいの持てる死生観の科学的な提示である。それゆえ、その「死後生仮説」や「生まれ変わり仮説」は、国内外の権威ある精神科医や臨床心理学者や飯田氏自身のカウンセリングによって集められた、臨死体験者や、退行催眠療法の患者や、前世の記憶を持つ人たちの、膨大な証言に基づいたものである。これらの研究では、死後は、魂再生のための時間「中間生」（英語の専門用語では life-between-life や the in-between state 等）と呼び、それ以上は触れない。そこから先は、たとえば幽界、霊界、天上界などの有無の真理については、各宗教が探究していてく領域だからである。したがってスピリチュアリティ教育は、その役割として、

「死後生」や「輪廻転生」を仮説として受け止めており、その真理そのものはあえて追究しない。

吉田氏は教育学者の立場から、スピリチュアリティ教育をめぐる多様な問題点を取り上げながら道徳教育を考察している。吉田氏は、スピリチュアルな見方を光源の一つとしてスピリチュアリティ教育を少し活用することで、実際の教育問題の解決に向けて明るい展望が開かれる、という考えのもと、スピリチュアリティ教育をすすめている。

いずれにしてもスピリチュアリティ教育には、人生の神秘や魅力を解き明かしてくれる力が十分にある。ゆえにスピリチュアリティ教育は、死を誠実に扱う文学作品の読み方においても力を発揮してくれるのである。

「死後生仮説」と「生まれ変わり仮説」

本作品論には、私は、科学的に証明されている「死後生仮説」と「生まれ変わり仮説」を中心的に活用していく。

『スピリチュアリティ教育のすすめ』において飯田氏は、「死後生仮説」については、「現在の自分の思考（脳意識）」と、「時空を超えて永遠に存在する自分の正体（魂）」との「つながり感」の構築、というテーマを掲げて、その思考方法に関してはこう述べる。「人間は、トランスパーソナルな（物質としての自分を超えた精神的な）存在であり、その意味で、『自分という意識』（魂）は、肉体的な死を超えて永遠の存在である」。(4) ゆえにこの思考方法を活用することで、死の恐怖からの解放、愛する者との死別による孤独感・喪失感という苦しみからの解放、物質的価値・物質的呪縛からの解放など、様々な効果を期待することができる。

もう一つ「生まれ変わり仮説」においては、「現在の自分」と「過去や未来でも別の人生を送る自分」との「つながり感」の構築、というテーマを掲げて、その思考方法についてこう述べる。「人間の本質は、肉体に宿っている（脳とつながっている）意識体（魂）であり、学びの場である物質世界を何度も訪れては、生と死を繰り返しながら、数多くの人生体験を通じて成長している」。(5) したがってこの思考方法からは、多数の人生を視野に入れた長期的な自己認識がもたらす「今生の意味付け作用」と「包括的平等感」などが得られる。今回の人生は自分の意志で、人生の問題集でもある学びの人生計画を立てて生まれてきたので、自殺しても何の解決にならない、来世でもまた同じようなつらい試練や課題を乗り越えなくてはならなくなる、という教えを、この思考方法から得ることができるのである。

しかしながら『スピリチュアリティ教育のすすめ』には、スピリチュアルな具体的事例はほとんど書かれていない。それゆえ、事例の理解を助けてくれるのは、飯田氏が2012年に著した『［完全版］生きがいの創造：スピリチュアルな科学研究が読み解く人生のしくみ』である。これは、私が「文学と死生観」というテーマに強い関心を持つきっかけを作ってくれた書物の一つでもある。この書には、専門家による検証を経て得られた「胎内記憶の事実」や「死後生の事実」や「生まれ変わり（輪廻転生）の事実」が、詳しく記述されている。論拠が十全であるそれらの科学的でかつ神秘的な事実が、読者に、今生を生きる勇気と力を与えてくれるのである。

ブライアン・ワイス博士

『[完全版] 生きがいの創造』において明かされる「死後生の事実」「生まれ変わりの事実」という学説は、膨大な医学的証言証拠に裏打ちされたものである。この 『[完全版] 生きがいの創造』が論拠として示しているのは、実証性の高い証拠で固められた医学的文献である。 たとえば臨死体験研究の権威である精神科医のレイモンド・M・ ムーディ博士（1944-）やエリザベス・キューブラー・ロス博士（1926-2004）の著書、徹底的な聞き取り型の実地調査と検証を丹念に重ね『前世を記憶するこどもたち』を始めとする多数の驚異的な証言報告を発表した世界的に非常に信頼の高い、生まれ変わりの研究者・精神科医のイアン・スティーブンソン博士（1918-2007）の著書、さらには、退行催眠による前世療法の第一人者である精神科医ブライアン・ワイス博士（1944-）の著書、そのほかの優秀な医学博士の学術論文や著書、加えて、飯田氏と専門医との共同の臨床研究結果、等である。

退行催眠による前世療法で明かされた過去生の実例としては、患者の証言通り、百年前の過去生の人物が実在していたことを示す具体的な歴史的事実や物的証拠を発見できたケース等もある。その患者は、自分が語る過去生の人物の生い立ちや遠い国のその場所やその時代に関しての予備知識や情報を全く持っていない。それらを、「たまたま脳が創作したデタラメな話が、歴史的事実と全ての点で偶然に一致したのだ」と決めつけるほうが、強引な解釈であり、むしろ非科学的な態度であろう、と飯田氏は述べている。

しかし興味深いのは、著者の飯田氏、それと、結果としては生まれ変わりの事実証明の研究報告を発表することになったワイス博士やその他のエリート医師たちの多くが、もともとは筋金入りの唯物〈唯脳〉論者の科学者であり、目に見えない魂の存在には否定的、懐疑的であった、ということである。このことは「生まれ変わり」や「輪廻転生」の概念が願望によるものではない、ということの証左を逆説的に示している、ともいえよう。

私は、「森の中での死」の主人公の最期を論じていくために、飯田氏も重要な参考文献として援用している、 ワイス博士が1988年に勇気を持って世に出した最初の書*Many Lives, Many Masters*（邦訳は『前世療法』）を活用していく。この本には、ワイス博士が担当した、重度の心の病を抱えた一人の女性患者キャサリン（治療開始1980年当時は二十七歳）が、数年にわたる退行催眠療法の過程で、図らずも様々な時代の前世を体験し、それら蘇った前世の数々の記憶のおかげで、自身の症状が劇的に改善されていく、という驚嘆の事実が克明に記録されている。

私が、作品の主人公である老婆の死出（しで）の旅に救いを見出すのに、ワイス博士の『前世療法』を必要とする理由の一つは、キャサリンが、過去生での死ぬ瞬間と死後の意識についても詳細に語っているからである。キャサリンは退行催眠の最中に「マスターの精霊たちが私に教えてくれます。彼らは私が肉体を持って八十六回、生まれていると言っています（the Master Spirits tell me. They tell me I have lived eighty-six times in physical state）」[(6)] とささやく。これはキャサリンの潜在意識が発した言葉である。そのキャサリンが、或る過去生で奴隷女として生き、そして年老いて息をひきとる場面の内容は、私のイメージを強く喚起し、「森の中での死」の老婆グライムズの最期に重ね合わせたくなるのである。キャサリンの前世の一つであったその奴隷女の性格や人生は老婆グライムズのそれが同じというわけではない。老婆グライムズは物語の語り手が描く人物であり、作中に老婆グラ

イムズのセリフは書かれていない。しかし、キャサリンの前世の臨終の場面と死後の意識にはリアリティがあり、そのため老婆グライムズのそれらを想像するのに、大きなヒントを与えてくれるのである。

それともう一つの理由は、優れたリアリズムの手法で生き生きと情景を描き出す20世紀作家アンダソンであるが、アメリカ人作家である彼は19世紀のアメリカ文学の思想的影響も当然受けている、ということである。とりわけ、19世紀中葉に、アメリカの思想家・詩人であるエマソン Ralph Waldo Emerson（1803-82）が提唱した超越主義（超絶主義）transcendentalism は重要であると思われる。超越主義は、唯物論・経験論に反対した、精神的・直覚的・超感覚的な宇宙観である。「大霊（the Oversoul）」が、宇宙に生命を与え、また全人類の霊魂の根源をなす神である、というのが超越主義の基本的原理である。その宇宙観は当時のアメリカの知識人に多大な影響を与え、その偉大な思想はエマソンの弟子である作家ソローHenry David Thoreau（1817-62）や、そのソローと同世代の詩人ホイットマン Walt Whitman（1819-92）にも受け継がれていく。超越主義者エマソンは講演で、「すべての人は死なないし、あとで再び戻ってくる」と霊魂不滅の哲学真理を堂々と語り、ソローは日記に、自身の過去世の話を具体的に書き残しており、ホイットマンは詩集『草の葉』*Leaves of Grass* 所収の詩「ぼく自身の歌」“Song of Myself” の49番で、「自分は、過去において一万回も、死を経験した」と高らかに歌っている。この三人は、「死後生」や「輪廻転生」を当たり前の事実として受け入れているのである。この死生観が思想の水脈を通って、数十年の年月をかけて、アンダソンの潜在意識にたどり着いていたと考えても、不自然ではない。

語り手が語るわけ

スピリチュアリティ教育を生かせる文学の特徴として、その文章には、人間の霊性に対する畏怖の念が「音楽」のように静かに流れている、と私は先述した。それは、「森の中での死」の結末の少し前に書かれている次の文章から感じ取ったことである。

> それらのすべてのことは、あの老婆の死についての物語は、わたしにとっては、年をとるにつれて遠くから聞こえてくる音楽みたいになってきた。その音調は一度に一節ずつ徐々に聞き取るしかなかった。それらの音調が何を意味しているのか理解する必要があった。(The whole thing, the story of the old woman’s death, was to me as I grew older like music heard from far off. The notes had to be picked up slowly one at a time. Something had to be understood.)(7)

語り手は、おそらく1890年頃小学生の時に、それまで言葉を交わしたことは一度もなく、日常でその姿を見かけることも少なかった、一人の老婆の遺体を見た。そして今も語り手は、老婆の「死」についての物語が遠くで聞こえてくる音楽のように忘れることができない。このことから、この音楽は、物語の背景音楽であるとも解釈できる。

その女性は、年齢は四十歳に満たなかったらしいが外見は老婆であった。語り手はその老婆の苗字がグライムズであったということしか知らない。老婆の身の上について得た情報も、伝聞によるもので、確かなものとは言えない。前編でも説明したが、その女性は孤

児として生まれ、孤児のまま、ドイツ人夫婦が所有する小麦農場へ年季奉公に出されて、そこで奴隷同然に扱われ、その農場にたまたま働きに来ていたろくでもない青年ジェイク・グライムズ（Jake Grimes）と十代で結婚する。彼女は貧しい孤児だったので、人生で学校教育を受けることも教会に通う機会も許されなかっただろう。そういう境涯の彼女は、当然、神の祝福を受けたことはなかっただろうし、誰からも愛の言葉を掛けられたこともなかったであろう。このことを考えると、語り手に聞こえてくる音楽は、それは、生前彼女に聞かせてあげたかった賛美歌かもしれないし、あるいは彼女の死を悼む鎮魂歌かもしれない。この音楽は、老婆の霊性に対する、語り手の畏怖の念が作り出したものである。

語り手は、ある事件のルポルタージュを書くために記憶を呼び起こそうとしているのではない。この話は、報告文学、記録文学の類ではない。真相はわからないし、真相は重要でもない。話の要点をまとめることが目的ではないし、そんなことは意味をなさない。これは、一人の人間の「死」をただひたすら考える物語なのである。重要なのは物語のキラキラ光る一欠片（ひとかけら）一欠片であり、それら一欠片たちは、話の論理構成のために秩序よくまとまる必要はない。そのことは、以下に引用する物語の結末を読めばわかる。

> したがって、あの夜、わたしたちが家へ帰った時に兄がこの物語を語り、母や姉がその話に聞きいっていた時には、どうやらわたしには兄は要点をつかんでいないような気がしたらしいのだ。要点をつかむには兄はまだ若すぎたし、わたしだってそうだった。これほど首尾一貫した物語は独自の美しさを備えている（A thing so complete has its own beauty.）。
>
> わたしにしてもその要点を強調しようなどとする気はない。わたしはなぜあの時に不満を感じたのか、そしてその後もなぜずっと不満な感じを抱いていたのかを、説明しようとしているだけなのである。わたしがそのことをここでもち出すのも、こういう単純な物語をもう一度語り直さないではおれない気持ちになった理由を、理解していただきたいからにすぎない。（p.24）

真相よりも要点よりも、何よりも大切なことは、話の筋道は立っていなくても、光りを放つそれぞれ多様な形の一欠片たちがそこに在り、その話が「独自の美しさ」を備えているかどうかである。ここでいう complete は、話術の精度を指しているのでない。どんなに人工的に細工を施しても敵（かな）わない、霊性の物語が本来持っている complete な性質のことである。まだ子どもだった語り手が抱いた不満は、老婆の死の物語が持つ霊性の「独自の美しさ」を伝え切れないもどかしさだったのだ。そして今大人になった語り手は、この「独自の美しさ」をわれわれに語り直さないではいられないのである。

老婆の最期を見届ける

大人になった語り手は、森全体を包み込むような視線で、老婆の死を見届けていく。語り手が事実として覚えているのは、老婆は持っていったわずかな卵を使って町で物々交換をして、最後に肉屋に立ち寄っていたということと、それから一日か二日後に、森の中で一人の兎狩りの猟師によって彼女の遺体が発見されたことと、その遺体の様子と現場の状

況だけである。語り手と兄はその遺体を見た。それ以外のこと、つまり、老婆が死に至る過程、場面、老婆の心情、心理はすべて語り手の死生観、想像が作り出したものである。しかしそれらこそが、われわれにとって重要なのである。

雪が激しく降るある日の午後、その老婆は、やせ細った空腹の四匹の飼い犬を連れて、肉などの食料を買うために町に歩いて出掛けた。この四匹の犬は、老婆の亭主と息子に日常的に虐待されていたために、いつも優しく世話をしてくれるこの老婆を慕っていた。家にはヨボヨボの馬を付けたガタ馬車があるが、亭主と息子が自分たちのためにそれに乗って出て行ってしまったのだ。それゆえ老婆は寒い中、何マイルも歩いて家と町を往復しなければならなかった。帰りは、食料品が詰まって重くなった買い物袋をロープで背中に縛り付けて、リュックサックみたいにして運ぶことにした。暗くならないうちに家に帰り着く必要があった老婆は、近道のために柵をよじ登り、森の中を通り抜けることにした。老婆は途中疲れてしまい、一休みのつもりで一本の木の根元に坐り込んだ。これは愚かなこと（a foolish thing）だった。ここまでの老婆の歩み、その後ろ姿を、見ていた者や気にかけた者はいない。語り手の心の目だけがそれを追い続けていたのである。

そしてここからわれわれ読者は、老婆が息をひきとる場所と時間を共有することになる。ここは、霊性、神性を帯びた神秘的な空間である。いつのまにか、忠実な四匹の飼い犬に、ほかの農場の犬三匹が仲間として加わる。老婆は静かに目を閉じる。

> 彼女はしばらく眠りこんだに相違ない。すっかり冷えこんだ時にはもうそれ以上は寒さが感じられなくなるものだ。その日は午後はいくらか暖かくなり、雪は今までよりも激しい降り方になった。ついでしばらくたつと、空が晴れてきた。月さえ出てきた。（p.14）

老婆が寒さを感じなくなった、という証拠も、空が晴れて月が出ていた、という証拠もない。これは事実ではなく、語り手の想像、願望である。語り手は、老婆をこれ以上苦しませたくなかったし、老婆を暗闇の中に置きたくなかったのだ。そう思う語り手の言葉が老婆を照らす光となる。「老婆は森の空地の横の立木によりかかって眠りこんで（the old woman slept with her back to the tree at the side of the clearing）」（p.14）いる。その老婆の最期を看取ってくれる人は誰もいない。そこで語り手は、七匹の犬の群れに次のような、老婆のための「一種の死の儀式（a kind of death ceremony）」（p.16）をさせるのである。

> 老婆の前方の空地にいた犬たちは兎を二、三匹捕まえて食っていたので、いちおうの空腹は満たされていた。彼らはたわむれだし、空地の中を円を描いて走りまわった。それぞれの犬が前の犬の尻尾に鼻づらをくっつけて、ぐるぐると走りまわった。雪のつもった木々の下の月光に照らされている空地を、吠え声もたてず、彼らの足がやわらかな雪を踏みかためた円の上を、何匹もの犬が走りまわっているのは異様な光景だった。犬たちは何の物音もたてなかった。彼らは円を描いてぐるぐると走りまわった。
>
> その老婆も、息をひきとる前に、彼らのしていることを見ていたかもしれないのだ。一度や二度は目をさまし、かすんだ老いた眼でその異様な光景を眺めていたかもしれな

いのだ。(p.15)

七匹の犬が円を描くというこの弔いは「狼だった頃の原始的な本能（the primitive instinct of the wolf)」(p.16）が働いた行動かもしれないと、考えつつも語り手は、この弔いの間の、犬たちの声をこう伝える。「もうおれたちは狼ではないのだ。人間の召使になっている犬なのだ。人間よ、生きていてくれ！人間に死なれたら、おれたちはまた狼になるしかないのだから」(p.16）と犬たちは祈り続けているのである。この祈りの文章は、犬たちと老婆との愛情深い関係を表現している。

われわれはこの儀式に、円環性、連続性、の象徴を読み取ることもできる。たとえば、自分の前方の犬の尻尾に鼻をくっつける行為が最終的に自分の尻尾に後方の犬の鼻が接触することにつながる、という力学は、この世での人間の言動の影響、言い換えると、一人の人間がその人生において他の誰かに投げかけたものは巡り巡って必ず自分に返ってくる、という「因果の法則」を表現しているようにも映る。また、死後の中間生での数々のソウルメイトたちとのつながりを表わしているようにも見える。加えて言えば、七匹の犬は一つの魂の仮初の姿であると見なすと、一つの魂は肉体という衣をまとい、愛を学び成長し、寿命がきたら古い衣を脱ぎ捨てて、中間生に戻りそこで再生の時を過ごした後、新しい衣をまとい学びのために再び地上に誕生して生きる、それを何度も繰り返すという「輪廻転生」の概念と結びつけることもできる。

犬による弔いの光景を眺めていた老婆の意識は薄らいでいき、いよいよその時が来る。

> その時にはもう彼女も大して寒さは感じていなくて、ただ眠いだけだったろう。生命は長いあいだ肉体にしがみついているものだ。たぶんその老婆は頭が狂ってもいたろう。ドイツ人の家にいた少女時代の頃や、その前の、母親が棄てて逃げ出す以前の幼かった頃のことを、夢に見ていたかもしれないのだ。
>
> 彼女の夢は大して愉しいものだったはずはない。愉しいことなんか彼女には幾度も起きてはいなかったのだから。(p.15)

なんとも切なく、はかなさが感じられる描写であるが、同時にそこにはやわらか光が揺らめきながら現れ始めているようだ。これは語り手の言葉の光によるものである。老婆は一度も報われることのなかった人生を終える。「老婆は苦しむこともなく静かに息をひきとった。彼女が死に、グライムズの飼い犬たちのうちの一匹がそばへやってきて彼女の死を確かめると、すべての犬が走るのをやめた」(p.16)。老婆の苦しみは終わった。老婆の死を確認した犬たちは、老婆の遺体を傷つけないようにしつつ、老婆が背負っていた袋の中から肉を取り出して食べ始める。

われわれはその死の中に、ささやかでも救いを見出してあげなければならない。読者として、「このような人物こそ生まれてくる価値がある、このような人物こそ本当は幸せになってほしかった」と思えるような読み方を見つけたい。

孤児であった老婆は、ドイツ人農夫の農場にいた少女だった頃から、その一生は、人間や家畜に食べ物を与え続ける、捧げ続けるためだけのものだった。老婆が最後に立ち寄った肉屋の店主は、老婆に同情し、レバーや犬用の肉をおまけにくれた。病人みたいな老婆

にこんな寒い日に一人で買い物に歩かせるような亭主と息子に憤慨した肉屋の店主は、彼らのことを罵り出した。老婆はかすかな驚きの色を目に浮かべて肉屋のことをぼんやり見ていた。肉屋は、亭主と息子を飢え死にさせてやりたいくらいだ、と言った。これを聞いて、老婆は無言だった。語り手は、その時の老婆の心情をこうつづる。

飢え死にだって？生き物には食わせてやらなきゃいけないのに。人間にも食わせてやらなきゃいけないし、大して役には立たないにしろ、売れるかもしれない馬にも、これでもう三ヵ月ひと雫の乳も出さないあのかわいそうな痩せた雌牛にも。
馬に、牛に、豚に、犬に、人間。（pp.11-12）

これは、語り手の感受性が作り出した老婆の内面世界である。当時幼かった語り手が、生前の老婆の姿や表情を見て純粋に感じたもの胸に残ったもの、 そういう断片（fragments）を大人になってあらためて組み合わせて構築した、老婆の真の人間像である。ここに映し出されているのは、なんの欲も執着心もない、人や世の中を憎む気持ちもない、自分の持っているもの自分のできることを誰かにただひたすら与える、そういう人物像である。先に引用したが、この老婆の死の物語は語り手にとっては「音楽」みたいなものである。語り手はその音調（the notes）の意味を一つ一つ理解する必要があった。音楽は「霊性」であり、音調はその霊性の歴史を構成する要素であるとも思われる。霊性とはその人間の生き方の歴史である。語り手は音調を理解するために、老婆の人生の歴史をについて、次のように思いを巡らせる。

あの死んだ女は動物を養う運命を背負った女だった。いずれにしても、彼女のしてきたことはそれだけだったのだ。彼女は生まれる前にも（before she was born）、幼い頃にも、ドイツ人の農場で働いていた若い女だった頃にも、結婚したのちにも、老いてき、やがて息をひきとった時にも、動物を養っていた。牛でもあり、鶏でもあり、豚でもあり、馬でもあり、犬でもあり、人間でもあった動物たちを、養っていたわけだ。彼女の娘は幼い頃に死亡し、一人息子とは口もきかない仲だった。息をひきとった夜にも、彼女は動物たちにやる食い物を身につけて家路を急いでいたのだった。
彼女は森の中の空地で死にはしたが、死んだあとですら依然として動物を養っていたわけだ。（p.23）

この文章は、そのまま物語の結末部分へと連結する。老婆は、自分の手が届く範囲にいるすべての生きとし生けるものに、「食べ物」という命の源を提供し続けてきたのである。この引用文の「彼女は生まれる前にも」というのは、単なる比喩表現としての「天国にいた頃」ということなのか。もしかしたらこれには、老婆の「前世の人生で」という意味が込められているのではないか。霊的な「音楽」「音調」を理解するためには、語り手には、老婆の前世も視野に入れる必然性があったのではないか。

語り手は、老婆の死後生について、ほのめかしているようにも受け取れる。それは作品の終わり近くに書かれている次の文章がそうである。

わたしがおぼえているのは、あの森の中の光景（the picture there in the forest）だけであり、あたりに突っ立っていた人々や、雪の中にうつぶせで倒れていた裸の若い女のような姿態（the naked girlish-looking figure）や、何匹もの犬が走りまわった足跡や、その上方の澄んだ、寒そうな冬空だけなのである。白いちぎれ雲（White fragments of clouds）が空を漂っていた。それらの雲は木々のあいだの開けた狭い空間を競争するようによぎっていった。(p.22)

木々のあいだをよぎっていく「白いちぎれ雲」は、老婆の「霊性」を思わせるようだが、しかし文体は抑制的であり、語り手は、これ以上は踏み込もうとはしない。語り手はその直後の描写でも、「その森の中の情景（scene)」が現実にあった物語の基礎になっているが、「幾つかの断片的な事実（fragments)」はその後、ずっとあとになって徐々にかき集めるしかなかった、と述懐する。この森の光景は話の基礎になっているとはいえ、やはりこれは記憶の中の話であり、鮮明な部分とぼんやりとしたところが、入り混じっていると考えられる。そこで語り手が、「ちぎれ雲」を表わすために使った fragments と、「断片的な事実」にも用いた fragments、この言葉は、目に見えない何か、心象風景の中を漂い揺らめく何か清らかな光の性質を表わしているように思われる。fragments は音調 notes と同質のもので、それら一つ一つは光を放っており、老婆の霊性の持つ「独自の美しさ」の要素である。語り手は、発見された老婆の遺体を美しく描くことにとどめている。したがって、ここから私は、老婆の死後生を描く役目を引き受けたい。そうすることで、この暗い森をまばゆい光で満たしていきたい。

老婆の死後生を描く

『前世療法』のキャサリンは、セッションの過程で、十以上の前世を思い出す。その時の自分の名前も憶えている。患者であるキャサリンはカトリック教徒なので、生まれ変わりの教えは受けたことはない。そのキャサリンが思い出した、それぞれの前世の性別や生きた時代や国は多様である。どれも神秘的でかつ具体的で信憑性があり、それぞれの人生には大切な学びや深い真理があったことを発見するのである。それぞれの人生での死ぬ時の年齢も様々である。大洪水で自分も含め多くの人が犠牲になった過去生では、死後に「雲が見えます」とか「ほかの誰々も見えます」というように、犠牲になった人たちの魂も死後生で一緒に空中を漂っていることを伝えてくれる。穏やかな死を迎えた人生では、看取ってくれている家族の様子を語り、死後は空中を漂っている。そのほかのどの前世の死後でも、キャサリンは決まって体を抜け出して空中を漂うのである。そして光に包まれる。時には死後に、別の前世の人生の中にいることもある。どの前世の死後生も描写が鮮やかで、光が迎えにくるし、中間生ではほかの数多くの魂を目にするのである。マスターという光の指導者と出会い、その人生で学んだことや得たこと、それに自分には何が足りなかったかという反省、などその人生を、自分でしっかりと総括する。

臨死体験研究者のムーディ博士やキューブラー・ロス博士を始めとする、多くの研究者・専門医が集めた証言では、患者は「臨死後」に、自分の肉体を抜け出し、空中に浮かびながら、置いてきた肉体を見つめる。その時には、自分の肉体へは関心や未練がほぼなくなっている。魂は漂いながら、ほかの生きている人たちのことを見つめる。そこから、

様々なプロセスを経て、彼らの魂は、これまでの人生の忠実で鮮明な回想をする。誰かを傷つけた場面ではその相手の痛みを同時に感じ、誰かを喜ばせた場面ではその相手の喜びの感情を共有する。それは相手が動物の場合でも同じである。[8] こういう回想体験は、キャサリンの証言では、語られない。

『前世療法』第十二章においては、キャサリンが15世紀にどこかの国でデンマーク人と戦争した男性兵士だった前世では、その死後に、霊界に七つの階層（seven planes）があることを知る。その霊界のそれぞれの階層は、その魂の学びのレベルに応じて行ける仕組みになっていて、より高いレベルの魂はより高い階層に行くし、魂のレベルは来世の生き方をも決める。今生で返せなかったカルマは来世で払わなければならない、とも語る。このカルマの原理というのは、生まれ変わりの概念のないカトリック教徒には、思いつかないことである。

仏教の教えでは、霊界は四次元の低霊級界から始まり、上にいくにしたがって高級霊「菩薩」「大菩薩」「如来」「大如来」「仏陀」の住む清浄な天上界がある、とされる。キリスト教の天国には、天使、大天使、主イエス・キリストが住む、というイメージが浮かぶ。これらはあくまでも一般的なイメージである。

キャサリンが体験する前世の記憶はどれも興味深いものである。今回は「森の中での死」の老婆の死後生を描くためには、『前世療法』の第六章で紹介されている、キャサリンの前世を部分的に取り入れたいと思う。国は不明だが、18世紀のことである。性別は女性で、お屋敷の奴隷同然の召使として働き、苦労が多く、死ぬ時まで希望の持てない人生だった。キャサリンはその時の人生での、馬に蹴られた時の、たいへん痛い悔しいみじめな感情を思い出すのである。そして、老いた自分の臨終の場面を思い出す。

「家が見えます。私はベッドの上です。ベッドの上に横たわっています。誰かが私に飲み物をくれました。温かい飲み物です。はっかの香りがします。私は胸がとても苦しい。息がうまくできません。胸は痛いし、背中もひどく痛みます。……ひどい痛みです。……痛くてもう話せません」。彼女の呼吸がひどい痛みのため速く、しかも浅くなった。何分かひどく苦しんだあと、彼女の顔の表情がやわらぎ、体の力が抜けた。そして呼吸が元に戻った。[9]

「森の中での死」の老婆グライムズは行き倒れになって、眠るように死んだ。キャサリンの前世である老婆は具合が悪くなり、病床で苦しみながら死んだ。そういう違いはあるが、死んだ瞬間、表情がやわらぎ、体の力が抜ける、という共通性が見られる。死後は一体どうなるのだろうか。老婆グライムズを意識しながら、キャサリンの証言の続きに注目したい。

「私は体から抜け出しました」。彼女の声は大きなしわがれ声になった。

「すばらしい光が見えます。……人が大勢、私の方に来ます。私を助けに来るのです。すばらしい人達。彼らは少しもこわがっていません。……私はとても軽くなっています」。長い沈黙が続いた。[10]

これは死の直後の感覚である。老婆グライムズの魂も、冷え切った肉体を抜け出たのであろう。空中に漂いながら老婆グライムズは自分の亡骸を見つめ、犬たちの様子も眺める。しばらくはそこに漂う。ここで私は語り手が森の中の老婆の遺体について描写している場面を振り返りながら、同時に、老婆の霊魂の動きを垣間見たい。

老婆が死ぬと犬たちは、老婆の遺体を木のない空地に引きずり込む。ドレスは裂けてしまうが、遺体には手を触れない。バッグの中の肉を食べるだけである。それは現場の状況から明らかなことである。老婆の霊魂は上からこの様子を眺める。彼女は、空腹の犬たちが一心不乱に肉を食べている姿を見て安心する。老婆は満足する。老婆は自分の遺体を見る。「発見された時には彼女の死体はこちこちに凍っていて、肩も狭ければ、からだも痩せ細っていたので、死体になった今は魅力的な若い女の死体みたいだった（Her body was frozen stiff when it was found, and the shoulders were so narrow and the body so slight that in death it looked like the body of some charming young girl.）」（p.18）。老婆は、若く美しい遺体が自分ではないように思うのである。不思議なことに、自分の遺体にさほど関心がなくなる。彼女にはすでに、この世的な執着というものがほぼなくなっているのである。しばらくの間彼女は森を漂う。魂には時間の感覚というものがない。翌日か翌々日、猟師が遺体を発見する。猟師はあわてて町にこのことを知らせに行く。彼女の魂は猟師についていく。猟師の知らせを聞いて、多くの男たちが現場に駆けつける。若い頃南北戦争で片脚を負傷した年配の警察署長が脚を引きずりながらやってくる。葬儀屋も来る。男たちが集まる。その中に小学生の語り手とその兄が混じっている。老婆は、幼い男の子である語り手が何か霊性を感じ取っていることに、気づいている。猟師は現場に向かう途中、遺体の印象をこう語る。「どこにも傷口は見かけませんでしたね。きれいな若い女でしたよ。顔は雪の中に埋まっていました。いいえ、見たことのない女でしたね（I didn't see any wounds. She was a beautiful young girl. Her face was buried in the snow. No I didn't know her.）」（p.19）。老婆もこの言葉を聞く。老婆には集まった人たちの間でかわされる会話や心の中で思っていることまで、聞き取れるのである。老婆は、自分がこんなにも人々の注目を引いている現実を不思議な気持ちで受け止めている。語り手はこう振り返る。「凍りついたびくとも動かないからだを月光の中に横たえているその女は、老いた人間のようには見えなかった（She did not look old.）。男たちの一人が雪の中の彼女のからだをひっくりかえし、わたしは何もかも眼にした。異様な神秘的な感情にとらわれて、わたしのからだはふるえだし（My body trembled with some strange mystical feeling）、兄のからだもふるえていた。寒さのせいだったのかもれない」（pp.20-21）。この段階で、霊界から大いなる光が降り注がれている老婆の魂は、一層輝きを増している。肉眼では感知できないが、その光は、老婆の霊魂を通じてそのまま森全体を照らし出す。聖なるシンフォニーが響き始める。その聖なる音楽は、その後語り手の潜在意識の中に、物語の背景音楽としてずっと残り続ける。森に行き渡るその霊性の光のため、集まった大人たちも、遺体の美しさに神々しさを感じる。人々の潜在意識の中で霊性に対する畏怖の念が互いに交流し合う。それは、老婆の霊性の fragments が「ちぎれ雲」となって、人々の潜在意識を通り抜けているからだ。語り手はこう思う。「その死体があれほど愛らしく白く、あれほど大理石のように見えたのは、凍った肉体にしがみついている雪のせいだったのかもしれない（It may have been the snow, clinging to the frozen flesh, that made it look so white and lovely, so

like marble.)」(p.21)。語り手は、潜在意識の中では老婆の霊性を感じ取ってはいるが、いざ言葉にすると、それは雪の白さのせい、としか言えないのである。現場にいた鍛冶屋が自分のオーバーコートを脱いでそれで彼女の体をおおい、彼女を抱き上げて町に向かって歩き出す。ほかの人は無言のままついていく。遺体が美しい容貌をしているので、男たちは誰一人、それが、あの老婆だとは気がつかない。老婆の魂も、その一行についていく。運ばれている自分の美しい姿を不思議な感覚で見つめながら、老婆は森をあとにする。もうこの世に未練がなくなった老婆は、ほどなくして、一行を離れ、そのまま天空に舞い上がっていく。

ここからキャサリンの証言の続きを引用する。

「今、終わった人生について、何か思うことはありませんか？」

「そんなことはあとにして下さい。今はただ、平和を感じています。今はくつろぎの時なのです。みんなくつろぎが必要なのです。魂は……魂はここで平和を見つけます。すべての体の苦痛を地上に置いてくるのです。魂は平和で落ち着いています。すばらしい感覚です。……すばらしい。いつも太陽の光が降り注いでいるような感じです。光がすごく輝いています。すべては光から来るのです！エネルギーは光から来ます。私達の魂はすぐにそこに行きます。ちょうど、磁石の力に引きつけられてゆくのと同じように、すばらしいわ。力の源みたいです。光は私達をいやしてくれます」

「光はどんな光ですか？」

「いろいろな色をしています」。彼女は沈黙をし、その光の中で休んでいた。

「何かを感じていますか？」私は思いきって聞いてみた。

「何も……ただ、平和な気持ちです。友達に囲まれています。みんなここにいます。たくさんの人が見えます。知っている人もいます。知らない人もいます。でも、みんなここで、待っています」。彼女は待ち続けた。時間がゆっくりと過ぎていった。私は時間を早めることにした。(11)

キャサリンが前世の死後に会う人たちは、ソウルメイトのことである。つながりの強さは、それぞれ違いはあるが、大きな意味で、キャサリンにとってのソウルメイトである。老婆にもソウルメイトはいたのだろうか。ここから、私は、光に導かれて天空にのぼっていった老婆の魂の物語を語りたい。

魂となった老婆グライムズは、天空の鏡に映し出されている自分が美しく若い女性であることを知って驚く。それは自分の発見された遺体と同じ見目形をしていたのである。美しいグライムズは、終えてきたばかりの人生の再現映像を見ることになる。自分が誕生する場面を見る。生きている時には知ることのなかった、潜在意識の中に隠されていた、眠っていた真実、秘密が明かされるのである。彼女は孤児であった。彼女の母親はなぜ我が子を捨ててしまったのか。母親にはやむにやまれぬ事情があったのかもれない。あるいは、彼女が記憶のない幼い時に、母親は死んでしまったのかもしれない。われわれにはわからない、その秘密がいま光によって彼女に解き明かされるのである。彼女は孤児として育った頃の出来事を見ていく。そしてドイツ人の夫婦が経営する農場で孤独を感じながらも休むことなく一生懸命に働く自分の姿を眺める。ドイツ人のその農夫は、彼女に下心を持っ

ている。彼女はそれにおびえた。親身になって話し相手になってくれる人はいなかった。人生で友だちはいなかった。それでも彼女は家畜たちに愛情をこめて餌を与える。犬にも餌を与える。動物たちは大いに喜び感謝する。その喜びと感謝の感情を、グライムズは共有する。この喜びは、肉体を持っていた時には全く感じることができなかったものである。結婚後も苦労が当たり前の日常だった。夫のジェイクの暴言と暴力にも堪えた。息子にも冷たくされた。愛娘を幼くして失った時は、愛別離苦の暗闇の中にいた。つらく悲しかった。しかし、いま美しいグライムズを温かな新な光の存在が迎えてくれる。誰だろうと思う。すると、あの愛娘がにこにこしながら自分に抱き着いてきたのだ。愛娘はグライムズのソウルメイトだったのである。愛娘はこの時をずっと待っていたのである。大きな慈悲の光に包まれている二人の魂はこの上もない幸せと平和とやすらぎで満たされる。グライムズは光の指導者から最大の賞賛を受ける。なんの欲も執着心も持たず、生きものに命のエネルギーである食べ物を惜しむことなく与え続け、生きものたちのためにすべてを尽くした、と。畑を耕したり寒さの中薪を集めたりするために忍耐強く体を使い切った、と。見返りなど全く考えない清らかな生き方だった、と。誰にも褒められず、感謝もされず、認めてもらえなかったが、光の指導者は、彼女の人生を愛情深く絶えず見守っていた、と伝える。ここで彼女は、自分の人生はひとりぼっちではなかったことを、初めて知るのである。

ここで、キャサリンの話に戻りたい。ワイス博士は、光に包まれているキャサリンに質問する。それはキャサリンにというよりも、キャサリンの光の指導者に向けての質問である。人間がいつ生まれ、いつ死ぬのか、どんなふうに生まれ、どんなふうに死ぬのか、それは自分で選ぶのか、自分の環境も、生まれ変わる時期も自分で選ぶのか、といったことを質問する。すると「詩人の声（the voice of a poet）」が聞こえてくる。これはキャサリンの光の指導者のひとりである。

> 人間はこの三次元の世界（our physical state）にいつかやって来て、いつそこを離れるのかは自分で選ぶのだ。こちらの世界へ送られてきた目的を達成した時、我々は自分でそれを知る。自分の時間が終わったのを知り、死を受け入れるのだ。これ以上この人生では何も得ることができないと知るからだ。まだ時間が残っている時には、死にかけてもその間に魂は休息し、エネルギーを再注入されて、再び、肉体へ戻ってくることもある。この世に戻るべきかどうかよくわからない人は、せっかく与えられたチャンスを逃すこともあり得る。肉体を持っている間に果たすべき使命を遂行する機会を失うのである。[12]

この「詩人の声」を、グライムズの人生にあてはめて考えると、作品の読みが、より深まっていく。グライムズには大いなる使命があったのだ。それは彼女にしか乗り越えられない大きな試練であった。生きている語り手にも大いなる使命がある。それは、われわれ読者の「死生観」を、より深めさせるための語りをすることである。キャサリンはその前世の体験を通して、信仰心の足りなさと人間の抱く怒りと憎しみの感情を、反省するという大きな学びを得る。グライムズは、ソウルメイトである愛娘と来世での時代や国や互いの関係性等、さらなる成長のために綿密に計画を立てる。具体的に来世で実行すべきこと

は、今度はきちんとした教育を受けること、教会に通い信仰心を高めること、そして自分の考えを言葉でしっかり伝えられることである。そこから発展して、もっと大きな愛を学び、菩薩のレベルを目指して、彼女はソウルメイトである愛娘と相談しながら人生の問題集を作る。そのために彼女は愛娘と一緒にしばらくの間、中間生で過ごすのである。

（終わり）

注

（１）飯田史彦・ 吉田武男共著『スピリチュアリティ教育のすすめ』（PHP 研究所 , 2009）, p.46. 飯田史彦著『[完全版] 生きがいの創造：スピリチュアルな科学的研究が読み解く人生のしくみ』（PHP 文庫 , 2012）には、スピリチュアルな具体的な事例が豊富に紹介されている。

（２）前掲書, p. 47.

（３）前掲書, p. 51.

（４）前掲書, p. 71.

（５）前掲書, p. 78.

（６）Dr. Brian Weiss, *Many Lives, Many Masters,*（Simon & Schuster Inc, 1988）, p. 56. 引用の日本語訳は、ブライアン・L・ワイス著（山川紘矢・亜希子訳）『前世療法：米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』（PHP 文庫 , 1996）を借用する。

（７）Sherwood Anderson, “Death in the Woods,” in *Death in the Woods and Other Stories*（New York, Liveright・ING・Publishers）, p. 23. 大橋吉之輔編 *The Complete Works of Sherwood Anderson（XI）Alice and the Lost Novel Death in the Woods and Other Stories*（Kyoto, Risen Book Co, 1982）所収の版のものを使用した。以下はこの作品の引用はこの版による。カッコ内の数字は頁数を示す。引用の日本語訳は、橋本福夫訳『アンダスン短編集』（新潮文庫 , 1976）を借用する。

（８）臨死体験研究については、今回は主に、以下の三冊を参考にした。

レイモンド・A・ムーディ・Jr. 著（中山善之訳）『かいまみた死後の世界』（評論社 , 1989）

エリザベス・キューブラー・ロス著（伊藤ちぐさ訳）『死後の真実』（日本教文社 , 2017）

ダニエル・ブリンクリー/ ポール・ベリー共著（大野晶子訳）『未来からの生還：臨死体験者が見た重大事件』（同朋舎出版 , 1995）

『未来からの生還』には、臨死体験者であるダニエル・ブリンクリーが「臨死後」に経験した人生の回想が克明に記されており、pp.26-27では、動物の感情が以下のように鮮やかに描かれている。「たとえばあるとき、大叔父と一緒に車を走らせていたら、男が山羊を殴っているところに出くわした。山羊の顔はフェンスにはめこまれているようだった。その男は枝を手に、山羊の背中を力まかせにたたいているのだ。山羊は、恐怖と苦痛から、さかんに鳴き叫んでいた。私は車を止め、どぶを飛び越えてその場に向かった。男が振り返る前に、私は彼の後頭部を、思い切り殴りつけた。大叔父が止めるまで、私は殴りつける手を休めなかった。山羊を逃がしてやると、私たちは煙が立つほどの勢いでタイヤをきしませ、その場を離れた。その一件を思

い返したとき、その男が感じた屈辱感と、山羊が感じた安堵の喜びに、満足することができた。山羊が、自分なりの言葉で「ありがとう」と言っているのが分かった」。このあと、ブリンクリーは、自分の犬に暴力をふるった時の犬の悲痛も感じさせられる。する。そして彼はこう結論づける。「後に、このときの体験を思い返してみて気づいたのだが、動物に暴力をふるったり、残酷に接したりする人間は、人生を回想するとき、その動物の気持ちを思い知ることになるのだ」。このブリンクリー回想体験は、「森の中での死」のグライムズが死後での回想で動物たちが感じた喜びと感謝の感情を共有する、という私の解釈の根拠を示す。

(9) Weiss, *op.cit*., p. 82.

(10) *Ibid*., p. 82.

(11) *Ibid*., p. 83.

(12) *Ibid*., pp. 83-84.

Received : September, 28, 2020
Accepted : November, 4, 2020